

熊本県立菊池農業高等学校 令和5年度(2023年度)学校評価表

1 学校教育目標						
『生徒が輝き、地域をきらめかせる菊農教育の創造と実践』						
「熊本の心」を基本理念とし、夢の懸け橋教育プラン、県立高等学校における教育指導の重点、学校安全・安心推進課取組の方向、体育保健課取組の方向、人権教育の推進に当たって、特別支援教育取組の方向、社会教育課取組の方向などを指針とし、豊かな人間性と社会の変化に主体的に対応できる生徒の育成を目指し、地域とともに活気に満ち溢れた学校づくりを目指す。						
2 本年度の重点目標						
『感動、感謝、思いやり、夢を育み未来を創る菊農生』～あらゆる可能性を見つめ一歩前へ～						
1 安全で安心な魅力ある学校づくりの実践 2 学習指導の充実 3 人権教育の充実 4 生徒指導の充実 5 進路指導の充実 6 農業教委育の充実 7 特別活動の充実						
3 自己評価総括表						
評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	目指す生徒像実現のために学校目標の周知を図るとともに、教育活動の実践による活性化を図る。	学校の教育目標及び本年度の重点目標の周知を図る。	・全職員が共通認識として実践する。 ・保護者、生徒の学校教育目標認知度を保護者80%以上、生徒70%以上に高める。	・職員会議、研修等で常時啓発する。 ・学校ホームページ、生徒総会、育友会総会、広報誌等を通じて啓発を図る。	B	・広報活動にはSNSを利用し向上が見られた。次年度は、日頃の学習活動や学校行事等とおして更に認知度を上げる取組みを推進したい。
		社会で生き抜く力を持った生徒を育成する。併せて、生徒の自己肯定感を高める。	・基本的な生活習慣を身に付け、夢の実現に向かって、挑戦する生徒の育成。 ・本校における通級指導を充実させ、全職員が理解し実践力を高める。	・基礎学力の向上を図る。 ・通級指導に関する職員研修等とおして、全職員への周知と共通認識を図る。	A	・朝読書の実施は、落ち着いて授業をスタートさせることに繋がっている。 ・「通級による指導」は十分な成果をあげている。
		学校教育目標実現に向けた職員の意思統一と組織の活性化を図る。	・職員研修の充実と各部の連携推進及び学科間の協力体制を促進する。 ・新入生充足率80%以上に向けた取組を行う。	・生徒理解に係る職員研修を充実させる(学期に1～2回)。 ・生徒の夢の実現を達成させる為の指導体制を強化する。	A	・生徒支援、生徒指導をスムーズに実施するための職員研修、生徒理解・特別支援教育推進委員会の開催、関係者による教科連絡会により、情報の共有を図り継続的な支援ができた。
	校長を中心とした指導体制のもと学校教育目標を実現する。	学校情報を分かりやすい内容で定期的に発信する。	・ホームページ掲載情報をタイムリーに更新する。(特に、新着情報)	・ホームページのシステムを職員に周知し、各行事の情報発信を学科毎、タイムリーに更新する。	A	・「安全・安心メール」「すぐーる」を活用することで、緊急連絡や行事連絡(各種行事の事前連絡等)等、旬な情報を迅速に伝達することができた。
	業務改善、働き方改革を推進して、長時間労働の解消を行う。	・主任・主事・部長の意識改革を促し、トップダウンだけではなく、ボトムアップも意識しながら、業務改善、働き方改革を実現する。	・毎週水曜日を18時までの完全退庁を実現する等、職場の超過勤務時間年平均(1人当)360時間、月30時間以内を実現する。 ・年度末反省にて前年度より改善されたと感じた職員が体感する。	B	・ICT活用による業務の効率化を推進した。1月末時点で年間超過勤務時間の職員一人当たりの平均時間は26時間である。職員の意識は年々高まっている。年休取得に関しては、申請しやすい職場の環境作りに努めることができていた。	

学 力 向 上	生徒一人ひとりと理解授業・工夫と個別指導を徹底（学びのUD化）する。	生徒の学習意欲を高め、もっと知りたくなる授業を展開する。	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が「わかる・できる・もっと知りたい」を実感する授業を展開する。 学びのUD化に努める。 授業実施者がICTを駆使した授業展開ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 教育環境の工夫、ルールの明確化、視覚的支援の充実を図る。 ICT機器に関する職員研修を充実させ、授業でのICT機器活用率を高める。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 本校に来校されるICT支援員に機器の使い方等を学ぶ教職員も昨年より増加した。また、ICT機器を活用した授業も多くなり、他校のICT機器を活用した研究授業や公開授業を参考に教師一人ひとりが自己研鑽に努めている。
		習熟度に合わせた授業を展開し、わかる喜びを感じる授業を実践する。	<ul style="list-style-type: none"> 習熟度別に授業内容を組立て、「基礎学力」および「生きる力」を身につけさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 欠点保持者及び希望する生徒等に対し、学びなおしを行う場を定期考査前に設定する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 中学校既習内容について学びなおしを行う場面の時間を増やし、基礎基本の定着に努めた
	教職員と生徒が一体となった授業（公開授業の実施、及びグループ学習の導入）を実施する。	生徒の興味関心を引き付ける授業の展開を行う。	<ul style="list-style-type: none"> 学科・教科別に研究授業（アクティブラーニングを重視した授業ICTを活用し、かつUD化を意識した授業の展開）による資質向上を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 年間をとおして、統一したテーマをもとに、各学科、教科ごとに研究授業を実施し、授業改善に生かす。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 1,2学期をとおし、「学びのUD化」、「ICT活用」をテーマに3名の先生方が研究授業を行った。合評会を各教科で行い、積極的な授業改善ができた。
			<ul style="list-style-type: none"> 授業の公開による教職員の授業力及び探究心の向上を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 教職員相互の「学び合い期間」を設定し、授業見学と授業評価を実施しスキルアップに繋げる。 公開授業週間を行い、外部からの見学者に率直な意見を求め、授業改善に生かす。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 研究授業の様子を動画撮影し、教職員がいつでも視聴できるようにし、教職員相互の「学び合い期間」を設定した。公開授業週間を4年ぶりに開催することができた。
キ ャ リ ア 教 育 (進 路 指 導)	キャリア教育の充実	<ul style="list-style-type: none"> 進路意識の高揚 体験活動の充実 進路情報の提供 	<ul style="list-style-type: none"> 農業経営者育成を主とした職業意識の高揚 	<ul style="list-style-type: none"> 先進農家視察や現場実習を複数回実施 進路ガイダンス等を年1回以上実施 オンラインも活用した進路情報閲覧環境の改善 	B	<ul style="list-style-type: none"> 先進農家視察や現場実習は予定通り実施した。 進路ガイダンス等は年1回以上実施した。 オンラインの活用は現在進行中である。
	就職指導の充実	<ul style="list-style-type: none"> 職業意識の高揚 就職内定率の向上 早期離職防止 	<ul style="list-style-type: none"> キャリアサポーターの活用 希望就職内定率100% 早期離職ゼロを目指す 	<ul style="list-style-type: none"> 進路適性検査を年1回以上実施 キャリアサポーター面談の実施 ガイダンスや内定者指導を実施 企業の情報収集 配慮を要する生徒の支援におけるハローワークとの連携 	B	<ul style="list-style-type: none"> 進路適性検査は1回実施した。 キャリアサポーター面談は1月から開始した。 ガイダンスや内定者指導は2月に実施予定。 ハローワークと連携した支援は良くできた。
	進学指導の充実	<ul style="list-style-type: none"> 多様な進路希望実現に向けた支援体制の充実 	<ul style="list-style-type: none"> 大学志望者の早期の把握と指導の開始 農業大学校進学10名以上 	<ul style="list-style-type: none"> 進路希望調査を年2回実施 大学志望者の主事による面談の実施と、所属学科と連携した指導の早期開始 農業大学校説明会の実施と指導の早期開始 	B	<ul style="list-style-type: none"> 進路希望調査は2回実施した。 大学志望者の面談や指導は行ったが改善の余地がある。 農業大学校志望者の指導は早期から実施した。

生徒指導	豊かな心を育む指導の実践に取り組む。	生徒会、農業クラブを中心とした自主的活動による活性化を図る。	<ul style="list-style-type: none"> 生徒会、農業クラブを中心とした生徒の自主活動や部活動、ボランティア・各種委員会活動の促進を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒企画による各種行事や委員会活動をとおした自治活動力の育成を図る。 ボランティア活動への参加を推進し、社会に貢献する心を育てる。 部活動の活性化に努める。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 新型コロナウイルス感染症5類移行に伴い、生徒会活動、農業クラブ活動もそれ以前の様子を取り戻しつつある。ただし、中止や自粛の期間が長期にわたったことで、以前のスタイルを把握している職員も少なくなり、今年度は手探りでの実施となった。 ボランティア活動にも積極的な参加が見られた。 部活動について、活性化のためには現状把握と改善が急務である。
		農業教育における動植物の育成管理を通して豊かな心の醸成と、中途退学者の減少を図る。	<ul style="list-style-type: none"> 仲間との協力及び動植物の育成管理を通して責任感を育成すると共に、他者や周囲に配慮ができる心の醸成を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 仲間と協力して作業をすることで責任と周への思いやりの心を育てる。 動植物との触れ合いを通して、命を大切にす豊かな心と互いに協力し、互いを尊重する心を育成する。 上記の方策について、学校評価アンケートにて生徒の満足度90%以上とする。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 多くの生徒が農業実習に真摯に取り組み、仲間との協働や動植物の管理を通して命の大切さや互いを認め思いやる心を育んでいる。 本校に入学して（させて）良かったと答えた生徒、保護者はいずれも3.0を超えており満足度の高さがうかがえる。
生徒指導	規範意識を育てると共に安全教育の徹底に取り組む。	基本的な生活習慣の確立と規則やマナーを遵守する意識を高める。	<ul style="list-style-type: none"> 気持ち良い挨拶、制服の着こなし、時間を守る、貴重品の自己管理等、社会人となるための基礎基本を徹底指導する。 	<ul style="list-style-type: none"> 登校指導のなかで行う挨拶・時間厳守・身だしなみに関する指導を通して、生徒の規範意識を高める。 身だしなみ(服装・頭髪)については、社会情勢に応じた指導体制を整える等、全職員で統一した共通認識を持つ。 貴重品袋を活用した盗難防止に努めると共に、貴重品の自己管理の徹底を啓発する。 生徒、保護者向けのSNS教育を実施し、トラブルの未然防止に努める。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 生活の規律を守り、基本的な生活習慣が身についていると答えた生徒は昨年同様3.1を維持しているが、校則の見直しを積極的に進め、生徒・保護者・職員にとってより良い学校を目指す。 貴重品の盗難が数件発生した。実習なども含めた管理の難しさもあり、今一度管理を徹底したい。 SNSでの大きなトラブルはなかったが、マナー、モラルについての啓発活動は必須である。
		交通事故や犯罪等に遭わないために、意識の高揚を図る。	<ul style="list-style-type: none"> 交通ルールの遵守や交通事故防止等をはじめとする安全教育指導を徹底する。 	<ul style="list-style-type: none"> 全職員による登校指導および全校集会を月1回実施し、交通安全意識を高める。 通学方法別での交通安全指導、外部講師による交通安全講話を通して交通安全に関する知識と技術の向上を図り、交通事故防止につなげる。 防犯対策として、二重ロック点検・施錠指導を実施する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 年度当初の通学方法別集会、交通安全教育LHR、一斉登校指導により、交通安全意識向上を図ったが、年度当初の1年生に軽微な事故が多く見られた。 今年度は自転車置き場での自転車へのイタズラが多数発生した。施錠の呼びかけとともにモラルの向上へ啓発が必要である。

人権教育の推進	豊かな人権感覚をもつ生徒の育成に取り組む。	相手の立場や心情を理解できる生徒の育成を図る。	・人権感覚を高め、心豊かな生徒の育成に取り組む。	・学期に1回の人権LHRをはじめ様々な授業を通して人権感覚を育む。 ・人権講話や人権講演、人権集会などを捉えて人権の大切さを伝える。	A	・学期に1回人権LHRを実施することができた。特に「人権子ども集会」を全校生徒で視聴し、様々な差別について学ぶ機会を持つことで人権感覚を高めることができた。
		職員の人権感覚を豊かにする研修を実施する。	・毎学期に配慮を要する生徒等に関する研修を実施することで生徒に対する人権感覚を磨く。	・人権教育推進委員会を学期に1回行い、共通認識と共通実践を図る。 ・年間を通して2回の生徒理解研修を実施し、全職員で課題を抱える生徒の状況を把握し、共通理解を図る。	A	・人権教育推進委員会を学期に1回行い、各学年の人権LHRについて共通認識・共通実践ができた。また、年度初めの生徒理解研修をはじめ、研修を適宜行うことで、生徒の特性や生活背景を全職員で共有し、生徒への理解を深め、生徒の人権を大切にしている指導ができるように努めた。
いじめの防止等	命を大切にしない、いじめ防止に取り組む生徒の育成に取り組む。	専門教育を通して、命を大切にすることを図る。	・自分や他者の命を大切にすることができる生徒を育てる。本校の人権教育が相手の立場に立つ生徒の育成に繋がっていると実感する生徒を、80%以上にする。	・人権委員会を中心に「いじめ撲滅宣言」の読み上げ、クラス掲示を行う等、感謝の心と他者を認める心を意識させる。	B	・人権集会で人権委員長がメッセージを伝えるとともに、「心のきずなを深める」ための標語作品募集に全生徒で取り組み、生徒一人ひとりが他者を意識し、尊重する大切さについて考える機会を作った。
		生命尊重の意識と自尊感情の確立を図る。	・他者を思いやる心の醸成だけではなく、自己肯定感を高めることができる生徒を育てる。 ・本校はいじめの防止をはじめ、人権教育の姿勢を基本に生徒への対応が行われていると実感する生徒を、80%以上にする。	・LHRや日常の授業・実習で、命を育て、命をいただくことで生かされていることを学ぶ。 ・特に、専門教育を通して、他者を思いやる心、協働する心を育成する。	A	・各学科の学習や実習を通して専門性を高めるとともに、命の大切さを学んでいる。さらに自己肯定感をたかめる教育活動を目指す。 ・いじめは数件発生しているものの、先生方の早期対応の成果が表れており重大事態は発生していない。今後も丁寧な対応、早期の対応を心掛ける。
専門教育	地域と連携した農業の推進に取り組む。	いじめ防止に積極的に取り組むことのできる生徒を育成する。	・いじめの未然防止や早期発見、SNS等のトラブル防止に努める。	・LHR等で人権問題を取り上げ、いじめや差別をなくす生徒の育成と正しい言動ができる生徒の指導を行う。 ・日頃から担任を中心に個人面談の機会を設けるなど、生徒の日頃の悩みを把握し、いじめの未然防止、早期の発見に努める。	A	・各学期アンケートによる実態把握および個人面談を実施し、いじめの未然防止、早期発見・対応につながっている。 ・担当組織で情報共有を図ることで組織的な対応につながっている。それらが早期解決につながり重大事態は発生していない。
		スマート農業を通して、地域と連携した農業の推進に取り組む、農業経営者を育成する。	・外部講師等を活用して、就農教育の推進と地域に開かれた農場の展開に努める。	・農場を地域に開かれた学校の拠点とし、農業の新しい技術や情報を校外に積極的に発信する。 ・5年後を見据えた農場改革をスタートさせる。	B	・施設設備の老朽化、スマート農業への対応等、農場経営の課題も多い。 ・JA菊池まんまキッズスクール、くまもと農業フェア、キクロス祭り等多くのイベントにて学校PRができた。 ・JGAPの取得（県内農業高校初）によって衛生面に配慮した出荷調整、安心・安全な労務管理等につながった。

		農業教育により自信と誇りを持った農業連を経営者と関連を産業者を育成する。	・農場を生徒の学習発表の場と位置づけ、農業教育に対する自信と誇りを育む。	・学習成果を積極的に発表し、身につけた専門性を将来に活かす進路指導を実践していく。 ・蒼生会(同窓会)等、優秀な農業経営者との交流を深め、農業に夢を持たせる。	A	・即就農者が3名、農業法人や農家等への雇用就農も増加傾向にある。 ・農業クラブでは、鑑定競技で全国大会優秀賞を受賞したほか、51年振りに熊本県で開催された全国大会で家畜審査競技の運営を成功に導くなど多くの生徒が活躍した。 ・資格取得農業技術検定において2級3名合格、アグリマイスターも3名獲得した。
環境教育	環境保全活動や環境問題に積極的に取り組む。	学校版環境ISOに取り組むと共に、農業を通して環境整備に意欲的に取り組む態度を育成する。	・環境にやさしい農業を実践し、環境保全や環境問題への関心を高め、意識的に取り組む態度を育てる。	・学校版ISOの認定校として、校内外のクリーン活動を更に充実させる。 ・地域(主に管内の公的機関を中心に)を含めた花いっぱい運動を展開する。	B	・学校版ISOの認定校として、校内外のクリーン活動を毎学期実施できた。 ・地域(主に管内の公的機関を中心に)を含めた花いっぱい運動を学科の協力得て実施できた。
		美しい学校づくりをテーマに環境美化活動に取り組む。	・環境美化活動を実践し、美しい環境の中で豊かな感性を育む。	・美化コンクールを実施する。 ・美化委員を中心に学校周辺の美化活動を年5~6回行う。 ・ゴミの分別を更に進め、環境に優しい生徒を育成する。	B	・毎学期、美化コンクールを実施し、学習環境の意識向上に努めることができた。 ・美化委員、ボランティア生徒が参加しに学校周辺の美化活動を実施できた。 ・ゴミの分別を実施、環境に配慮できる生徒の育成が達成できつつある。
地域連携(CS)	育友会との積極的な連携・協力に取り組む。	円滑な学校運営のために情報提供に努める。	・保護者へ学校行事や生徒の様子等の情報提供に努め、本校への理解と協力を得る。	・年3回の育友会会報作成等に協力し、本校のPRに努める。 ・ホームページや安全安心メールを活用し、育友会活動の状況や、学校行事の周知徹底に努める。	B	・年3回の会報は発行でき、保護者に学校や育友会活動についてお知らせできた。 ・ホームページに育友会のコーナーを作ってもらい活動状況や各種活動への案内、募集を行うことができた。
		PTA活動のさらなる活性化を図る。	・学校行事への保護者の出席率向上を図る。 ・規約の見直しや、組織改編等を検討し、効率的、有意義な育友会活動を目指す。	・保護者への迅速な情報提供に努め、保護者と学校の協働関係を図る。 ・クラス役員等のスリム化、役割の検討で、負担感なく参加しやすい活動を作り上げる。	A	・昨年度クラス役員の規約を改正しスリム化を行った。育友会活動については、「すぐる」の導入で広く募集をかけやすくなった。
	学校運営協議会を通し、地域と連携協力体制を確立する。	自主的に学び、考え、行動できる生徒の育成に努める。	・ボランティア活動に参加するとともに、地域住民とのコミュニケーションを深める。 ・総合型コミュニティスクールの充実に向けた取組を図る。	・学校行事、農産物販売情報等をホームページ、広報誌等で情報発信し、地域住民の来校のきっかけとする。 ・総合的な探究の時間において関係者との協力体制を強化し、地域の施設や人材活用を図る。	A	・菊農フェスタを開催し、農産物、食品加工品の販売は大盛況であった。 ・地域、行政機関からの意見・アドバイスをいただき、学校教育に対する地域との連携を強化することができた。

4 学校関係者評価

TSMCの影響による農家の減少を懸念している。農業高校のあり方は今後どうあるべきか考える必要がある。農業を大事にすべき。そういう面で農業高校は何かできると考える。

菊農で農を学んだ卒業生は、後継者にならなくても、農の理解者となって地域を支えてくれる。そういう人材を育成していただきたい。

ICT教育は非常に重要度が高い。ICTの整備に多くの予算が投入されていることもあり、ぜひ活用していただきたい。このことにより、生徒募集につながると考える。

脱炭素の取組、SDG2の取組はよい取組なので、ぜひ進めてほしい。民間と連携して商品開発をするなど特色を活かし魅力ある学校づくりを行ってほしい。職員生徒が一丸となったの取組みを今後も行って欲しい。

5 総合評価

学校教育目標や本年度の重点目標の実現のために全職員で取り組む事ができた。前期選抜・後期選抜の出願状況は、前年度と比べ、いずれも微増であった。

学習用コンピュータ端末の活用を推進し、ソフトウェアを使用した双方向データ通信による生徒と学校とのコミュニケーションを多くの職員が使用できるようになり、授業のICT活用を柱とした授業改善の取組が浸透してきた。

3年間を見通した計画的なキャリア教育を推進する事で、幅広い生徒の目標に対応した進路指導ができた。就職に関しては好調な求人環境もあり、県内就職率の向上をはじめ、高い成果が得られた。進学指導に関しては、難関大学への合格実績等更なる向上が望まれる。

農業自営における即就農者が3名、農業法人や農家等への雇用就農も年々増加傾向にある。就農支援会議、就農教育推進校事業、愛知県農業関係高校との交流会、卒業生講話等の就農支援により農業経営者、関連産業従事者の増加に直結する取組みができた。

通級による指導（LS：ライフスキル）本年度は、全職員に参加をお願いした。LSの授業を楽しみにしており、通常の学級では出せない思いや感情を表現できることで、自己発見や自己解放につながり変化や成長も見ることができた。

創立120周年記念式典、全国農業クラブ全国大会は成功裏に終了し、高い評価を得ることができた。体育祭やロードレース大会は感染対策を講じて実施することができた。菊農フェスティバルでは生徒の主体的な活動が見られ、地域へ学習成果を発信することができた。

いじめ防止や人権教育については生徒理解のための職員研修等を行い、配慮を必要とする生徒に関しての共通理解に努めた。生徒が抱える課題も複雑化してきているなか、県教委や外部専門家と連携し個別に対応することができた。

6 次年度への課題・改善方策

スクールミッションやKSHは高校の魅力化を図り、生徒募集に繋げる目標がある。その実現に向けて本校の特色を生かした取組みを推進していく。

ICT活用した授業形態に大きく変革していくなかで、学習活動を効果的にするために職員のICT活用能力を向上させる。

農場各部門において、生徒の実情や生徒数に応じて、規模の縮小や管理の在り方を見直し、働き方改革の推進も含め、教育課程や生徒数に応じた農場規模を検討していかなければならない。

国公立大進学希望者の合格に向けて、各部連携した計画支援を進める。

規範意識の醸成については、全職員の共通認識のもと、学校生活全般において積極的に生徒と関わり、組織的に課題解決に向けて取り組みたい。

学校の取組や生徒の活動等、魅力発信を更に強化し、地域に信頼される学校づくりに努める。

職員負担を軽減し、校務の効率化、情報の共有化の推進、職場の環境整備を図りたい。